

第1回ひょうご福祉の現場 若手リーダー賞

兵庫県内の福祉施設などで働く若手職員を励まそうと、公益財団法人神戸新聞厚生事業団(理事長・高土薫神戸新聞社会長)が創設した「第1回ひょうご福祉の現場 若手リーダー賞」の受賞者2人が、26日決まった。いずれも施設利用者や地域に愛情を持って仕事に励んでおり、福祉現場の模範として、さらなる活躍が期待される。

初の受賞者2人決まる

神戸新聞厚生事業団が創設

2人は、特別養護老人ホーム「いくの喜楽苑(朝来市)の西垣真太郎さん(39)▽特別養護老人ホーム大慈弥勒園(神戸市西区)の湯本巨さん(35)。

賞は、福祉現場で働く人たちの頑張りや成果が正當に評価され、福祉の仕事が若者の「あこがれ」になる社会を願ひ、同事業団が今年創設した。趣旨に賛同した神戸新聞社、兵庫県、同県社協、神戸市、同市社協が後援。県内の福祉・障害者など12団体から協力を得た。

賞の応募資格は、福祉の仕事に10年以上携わった人。選考指針は「現場のリーダーとして利用者らに愛情ある態度で接し、組織の改善に取り組み、生きる喜びを身をもって伝えているか」と定めた。

大学教授ら8人の選考委員が、書類選考を通過した候補者7人について、自己PRや候補者同士のディスカッションを通じて審査した。入所者とその地域への並々ならぬ愛情にあふれた2人を選んだ。

表彰式は、新型コロナウイルスの感染状況を考慮し、各受賞者が所属する施設の上層団体の役員会などで実施を予定。同事業団役員が賞金20万円、表彰状と盾を贈る。

「ひょうご福祉の現場 若手リーダー賞」選考委員

- ＝敬称略、◎は委員長
 ◎谷村誠 (兵庫県社会福祉法人経営者協議会会長)
 大和三重 (関西学院人間福祉学部教授)
 佐々木勝一 (神戸女子大健康福祉学部教授)
 野田誠一 (兵庫県健康福祉部社会福祉局地域福祉課長)
 杉田健治 (兵庫県社会福祉協議会事務局次長)
 若杉穂 (神戸市福祉局くらし支援課長)
 本田幹雄 (神戸市社会福祉協議会福祉部長)
 武田良彦 (神戸新聞厚生事業団専務理事)

選考委員会は書類選考を通過した7人の候補者を面接で審査し、員という立場を超え、「地域を支えたい」という意気込みが伝わってきた。福祉用具の活用を推進して

特別養護老人ホーム「いくの喜楽苑」で働く西垣真太郎さん。入居者の思いを聞くことを大切にしている。朝来市生野町竹原野



特別養護老人ホーム いくの喜楽苑(朝来市)

リーダー 西垣 真太郎さん(39)



特別養護老人ホーム 大慈弥勒園(神戸市西区)

主任生活相談員 湯本 巨さん(35)

賞創設の趣旨

2年前の春、神戸新聞厚生事業団の専務理事に就任した。以来、障害者、高齢者、児童・母子支援などを通じて、さまざまな福祉施設・団体で働く皆さんと話をする機会を得た。

介護職員らの情熱、社会的認知を

声。一方で、「某施設の若手職員は、実にユニークな取り組みをしている」といった評判も多々聞いた。

ちと懇談する機会があった。離職が話題となった。辞めたくなるのは、賃金などの処遇より「仕事で頑張りが成果が、組織や社会で正当に評価されにくいからではないか」という意見。全員がうなずいた。

職員を対象とした賞を創設し、受賞者の人柄や活躍ぶりを広く紹介するのはどうだろうか。新聞社がつくった福祉団体としての使命にかなうのではないかと。結果として、福祉現場で働く人々に、より注目が集まることを願う。中高生ら若い世代が福祉の仕事にあこがれを抱き、志す人が一人でも増えれば望外の喜びである。

「おれ」になる社会を願ひ、同事業団が今年創設した。趣旨に賛同した神戸新聞社、兵庫県、同県社協、神戸市、同市社協が後援。県内の福祉・障害者など12団体から協力を得た。

福祉用具の導入を進め、介護施設職員の体力負担の軽減に貢献した。正月や花火大会など季節の行事を大切にしているほか、地区の祭りにも出掛けて入居者と地域との交流の場を用意している。受賞には「同僚や入居者、家族、地域の人に支えられたおかげ」と喜ぶ。

朝来市出身。祖父の介護のため大学時代に取ったホームヘルパー2級の資格を生かし、県内5カ所特別養護老人ホームを運営する社会福祉法人「きらくえん(神戸市)」に就職した。

最初の3カ月は「食事を喉に詰まらせないか、力を入れて担ぐと骨が折れないか」といった恐怖

怖で入居者の体を触れなかったが、先輩の指導のおかげで徐々に克服できたという。

「老いることの喪失感を新人職員が理解することは難しい。だからこそ、細かい指導と気配りが求められる」と考え「入居者と新人の懸け橋となり、チームとしての成長に導きたい」。受賞で、新たな使命感が芽生えた。

介助負担軽減へリフト導入 努力認め合う職場環境に力

人を引きつける柔和なスマイル。「現場で働く職員のことを考え、行動してきたことが認められた」と破顔する。神戸市西区の特別養護老人ホーム「大慈弥勒園」で働いて11年。新人入所者への相談などを担い、施設の運営を支えている。

現場を離れた今も、手がすけば入所者と話をしに行く。「会えないと寂しいから。』もつと顔を出せ」って怒られちゃいますけど」と照れ笑う。

認知症になった祖母が同園に入所し、「親孝行のつもりで」と23歳で福祉の世界に飛び込んだ。前職は神戸・三宮で働くホスト。ネオン街からの転身は驚

きの連続だった。強みとなったのはホスト時代に培ったトーク術。とにかく話し、心を開いてもらうことに重点を置いた。「力を抜き、身を任せてもらうことで介助しやすくなる。互いに楽なんです」

介護の第一線で、気付いたのは高い技術を持つ同僚の存在。高いモチベーションで働いてもらおうと、「職員オプ職員選手権」というイベントを考えた。

「役に立っている」という実感があれば、きつと笑顔で働ける。職員は入所者の笑顔。全ての人に優しい施設を目指し、挑戦を続ける。(伊田雄馬)

講評

地域支える意気込み、離職防止の発案など評価

選考委員会は書類選考を通過した7人の候補者を面接で審査し、員という立場を超え、「地域を支えたい」という意気込みが伝わってきた。福祉用具の活用を推進して

西垣さんからは、老人施設の職導入、体に負担をかけない職場を目指すとともに、女性職員への気配りなど広い視点で施設運営に携

わっていることを評価した。

湯本さんは、職員を大事にする変えてくれるとの期待を持った。という視点から、同じ職場の仲間を、仲間が顕彰する制度を設けるについても、それぞれ、リーダーの頑張りが成果が、組織や社会で正当に評価されにくいからではないか」という意見。全員がうなずいた。

(選考委員会委員長・谷村誠)